

『我が人生より 第二部』から『第二次ローマ滞在』へ： ゲーテ『イタリア紀行』における叙述不可能なものを叙述する試み

平松, 智久
九州工業大学

<https://doi.org/10.15017/26522>

出版情報：九州ドイツ文学．25，pp.1-25，2011-10-12．九州大学独文学会
バージョン：
権利関係：



『我が人生より 第二部』から『第二次ローマ滞在』へ

——ゲーテ『イタリア紀行』における叙述不可能なものを叙述する試み——

平 松 智 久

はじめに

『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(1773)や『若きヴェルターの悩み』(1774)で名を馳せた疾風怒濤期の若き詩人ゲーテ(1749-1832)は、国力増強政策の一環として自然研究にも従事し、それを自らの詩作に生かそうと精力的に従事しはじめたヴァイマルでの宮廷生活、壮年期のイタリア体験を経て、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代/遍歴時代』(1796/1821)や『ファウスト第一部/第二部』(1808/1832)を完成させる古典主義の詩人になった。詩人は晩年になって、ロマン主義の詩人たちがひたすら可能性を追求して「無限なもの」に執着したのとは異なり、自然の内なる原理を捉え、人間の限界を越えないようにあえて不可能性を受容する諦念に至ったことで、逆説的に「無限なもの」を直観したのである。本論は、そのようなゲーテの変容に大きな影響を及ぼしたのが彼のイタリア体験であるという観点から、晩年ないし最晩年にまとめられた彼の『イタリア紀行』(1829)を考察し、詩人の変容の「瞬間」を捉えることを狙う。その際、彼の自然観の変遷を視野に入れることによって、ゲーテ文学に重低音として流れ続ける主題を明らかにする。

1. ゲーテ『イタリア紀行』と本論の意図

1786年9月3日早朝3時、「真の再生」(MA15, 174)¹⁾を願ったゲーテは、滞在中のカールスバートから「こっそり忍び出て」(MA15, 9)、幼少時からの憧れの地イタリアへと旅立った²⁾。ヴァイマルでの閉塞感から逃れるためであり、また、『ゲーテ著作集』に載せる新作を執筆するためであったという³⁾。その後、約一年半に及ぶイタリア滞在中の芸術研究と自然観察を通じて、ゲーテは「原植物」を幻視する体験に恵まれ、詩人としての自己をいわば「再発見」(WA IV8, 357)した。彼が「第二の誕生日」(MA15, 174)を迎えるまでの過程は、後に自伝的旅行記『イタリア紀行』(1829)としてまとめられているとおりである。しかし同書は、最初から『イタリア紀行』と題されていたわけではなく、またゲーテが1788年3月にイタリアを後にして四半世紀以上経ってからの出版であった。しかも資料として残された書簡は同書出版後に全て焼き捨てられている。こうした特殊な経緯の背景にはいかなる事実が潜むのか。

ゲーテのイタリア体験の叙述はまず晩年に『我が人生より 第二部』(1816-17)〔以下、

『第二部』と略記する」と題して刊行された。当初は、自伝『我が人生より 詩と真実 第一部』（第一巻1811、第二巻12、第三巻14、第四巻33没後刊）〔以下、『詩と真実』と略記する〕の続編として構想されていたのである。『第二部』は二巻から構成されており、まず『第二部第一巻』（1816）において、彼がカールスバートからイタリアへ旅立ち、ローマでカーニヴァルを初体験するまでの記録（1786年9月3日～1787年2月21日）が公開され、さらに翌年、『第二部第二巻』（1817）において、ナポリを拠点にイタリア南方のシチリアまで足を延ばした彼の旅の記録（1787年2月22日～6月6日）が続いた。それらが『イタリア紀行』と称されるようになったのはさらに12年後、最晩年の詩人が『第二次ローマ滞在』（1829）⁴⁾を完成させ、前二巻と併せた三巻本の『イタリア紀行』として取りまとめたからにはほかならない。『第二次ローマ滞在』は、南方への旅からローマに戻った壮年の詩人が二度目のカーニヴァルを体験した後、ヴァイマルへの帰途に就くまで（1787年6月7日～1788年4月）を綴ったものである。だが『第二次ローマ滞在』は、『第二部第三巻』としてではなく、別題目を得ることによって『詩と真実』から始まる自伝的叙述と区別された。つまり、ゲーテは自らのイタリアでの変容⁵⁾を後年に叙述し直ただけでなく、まさにその題名の変更によって、自らの壮年時の体験段階から最晩年の叙述段階への移行をも表わそうと意図したのだと考えられるのである。

それでは一体なぜ『第二次ローマ滞在』は、『第二部』から一回りも遅れて、最晩年に公開されたのだろうか。エッカーマンの『ゲーテ対話録』1829年4月10日の記録によれば『第二次ローマ滞在』執筆中のゲーテは、『イタリア紀行』は全て手紙を編集した（MA19, 324）ものであるが「第二次ローマ滞在時に執筆した手紙は別段そのために使える代物ではない」（MA19, 324）と嘆いていたらしい。だが、当時の記録が少なかったから執筆に時間がかかったのだというわけではあるまい。事実、それらの手紙の中には「当時の自分の内部の状態を表現する発言」（MA19, 324）が少なからずあったので「そのような箇所を抜粋して個々のものを繋ぎ合せ、それを自分の物語に挿入することによって、自分の物語に一種の調子と雰囲気を持たせる計画」（MA19, 324）を立てたのだと、ゲーテは打ち明けている。自伝的旅行記の作者は、『第二次ローマ滞在』執筆にあたって、「物語」に手を掛けた。この「自分の物語」meine Erzählungこそ、『第二次ローマ滞在』が『第二部』と区分された原因であり、完成が遅れた原因なのではなかろうか。本論の主たる考察対象は、最晩年のゲーテが生み出したこの「物語」である。

『第二次ローマ滞在』に描かれたイタリア体験の時期とその執筆時期との隔たりに着目しながら彼の「物語」を探る際、『ローマの謝肉祭』（1789）ほど考察に適した作品は他にないだろう⁶⁾。というのも、『詩と真実』、『イタリア紀行』をはじめとした彼の自伝的著作群⁷⁾が全て晩年になって初めて公開されたのに対して、『ローマの謝肉祭』は第二次ローマ滞在中、まさに謝肉祭期間中から執筆され始め、帰国の翌年に出版されただけでなく、最晩年になってさらに『第二次ローマ滞在』にほぼ同じ状態で再度掲載されているからである⁸⁾。すなわち『ローマの謝肉祭』は、壮年のイタリア体験期と最晩年の『イタリア紀行』公開時という両方の時期に出版された特殊なテキストにほかならない。また、そもそも

『ローマの謝肉祭』は、出版の経緯においてだけでなく、同書に叙述された彼のカーニヴァル体験自体が『イタリア紀行』全体においても極めて重要な役割を担っている。第一次ローマ滞在記である『第二部第一巻』と、南方旅行を主題とした『第二部第二巻』との構成的分離も、内容的ないし分量的な理由からだけでなく、『第二部第一巻』末尾で描かれた彼のカーニヴァル初体験が大きく影響しているからである。謝肉祭中の民衆の馬鹿騒ぎに対する嫌悪感が、一時的にせよゲーテをローマから離れさせる契機となった。そのことを想起すると『ローマの謝肉祭』は『イタリア紀行』全体にかかわっているのだと考えられよう。二度目のカーニヴァル体験記である『ローマの謝肉祭』をゲーテが『第二次ローマ滞在』後半の山場に配置したのも、単に時系列に倣ったためなのでは決してなく、実は、かつて謝肉祭を理解できなかった自分自身に対する詩人なりの再挑戦だったのである。

ゲーテはローマのカーニヴァルの叙述を企てるにあたり『ローマの謝肉祭』冒頭で「そのような祝祭がそもそも叙述不可能だという異論を恐れねばならない」(MA3.2, 218)と断る。それは、「かくも大きく生き生きとした塊である感覚的对象は、直接目の前で動いているものであり、各々が各自各流に直観し (anschauen) 把握すべきものである」(MA3.2, 218) からであり、しかも、「ローマの謝肉祭は、初めてこれを目にし、ただ眺める (sehen) だけのつもりであり、またそうすることしかできない異国の一見物人には、全体的な印象も喜ばしい印象も与えず、目を特に楽しませるわけでも心を満足させるわけでもない」(MA3.2, 218) からであるという。事実、後にゲーテに代わってローマに赴いたヴァイマル公国侯爵夫人アンナ・アマリアもこの祝祭を理解できなかったらしい。1789年4月17日付書簡でゲーテは彼女に宛てて、自分の『ローマの謝肉祭』という「小文によって何か享受できないものを享受できるようにすることが成功しましたなら、私といたしましてとても嬉しいことです」(WAIV9, 105) と応えている。享受できない (ungenießbar) ものを享受しうる (genießbar) ようにすることを目的とした謝肉祭の叙述においては「叙述自体の正当性が問題となる」(Vgl. MA3.2, 218)。そのように詩人は断言する。では、叙述不可能なものを叙述しようと試みる謝肉祭の叙述によって、彼が捉えようと試みたものは一体「何」であったのだろうか。そしてそれは「いかに」叙述されたのか。この〈叙述不可能なもの〉をめぐる問題は『第二次ローマ滞在』ないし『イタリア紀行』全体の主題に重なる。

以上の叙述不可能性に関しては過去の研究も、ゲーテのイタリア滞在時における芸術作品の「叙述の断念」、「伝達不可能性」として問題にしてきた。エルンスト・オスターカムプの『イタリア紀行』解釈によれば、『イタリア紀行』編集の際、ゲーテは自分の古典主義的美学を基礎づけようとして自分の作品から反ロマン主義的表現法を取り除いたが、それは、古代の芸術と自然を妥当な模範に規定する芸術史的枠組み作りに尽力することによってだけではなく、とりわけ彼が、芸術作品に直面して自らに流入するものとその叙述をほとんど完全に断念したことによってだった (Vgl. MA15, 662ff.)。オスターカムプは言う。「ゲーテの直観にだけ明らかとなった形式原理による芸術作品の説明は(中略)彼の伝達不可能性 (Nichtkommunizierbarkeit) の経験に結び付いている。『イタリア紀行』は、芸術を目の前にしてようやく——ゲーテ以前のヴィンケルマンもそうだが——イタリア旅行者の

芸術鑑賞眼が啓かれる過程を叙述する書である。その際に経験する芸術作品を先取りする想像力の脆弱さと、形式を直接的に観照する必然性への洞察によって、言い表し難いという常套句 (Unsagbarkeitstopoi) が繰り返し表現される。その常套句を使ってゲーテは強調するのである。芸術について意義深く話することができるのは、作品自体を前にした時だけだ、と」⁹⁾。「言い表し難さ」をめぐる議論は凡そ、オスターカンプのみならず他の解釈者においても、芸術体験自体に焦点が絞られていた。それに対し、本論はゲーテの叙述そのものに着目する。それは、芸術と文学の間隙を橋渡しする叙述の不可能性ばかりを強調するためではなく、むしろ、〈叙述不可能なものを叙述する試み〉によって彼が捉えようとした対象と方法を探ることに狙いがある。「言い表し難いという常套句」によってのみ言い表しうる「何か」がゲーテのまなざしの先にはあったのではないか。

そこで本論は、ゲーテのイタリア滞在をめぐる体験時と執筆時の二重の変容を明らかにするために、まず、『イタリア紀行』に描かれた彼のイタリア体験による変容の過程を追う。それから、変容の契機となった「原植物」の着案に至るまでの彼の自然学における精神的土壌と着案後の展開を押さえる。その上で『ローマの謝肉祭』に焦点を絞ることによって、同書の主題と意義を明らかにし、晩年から最晩年にかけての詩人の叙述の試みの意義を明らかにする。この考察過程において、『イタリア紀行』における『第二部』から『第二次ローマ滞在』へ至る詩人の変容の内実が浮かび上がるはずである。

2. 叙述するまなざし

ゲーテの31年前にローマに滞在したヨハン・ヨーアヒム・ヴィンケルマン (1717-1768) は、ローマが「全世界にとっての最高学府」(MA15, 176) であると書いた。1786年、最初にローマで直面したカーニヴァルにおける民衆の奔放な姿に「苦痛」(MA15, 209) を覚え、困惑し、辟易していたゲーテは、彼の言葉に励まされ、イタリアで「少なくとも、ある非凡な概念を獲得する」(MA15, 176) ことを誓い、「内部から作り変える再生」(MA15, 177) のために、「芸術精神と同時に道徳的精神を大々的に改装修理」(MA15, 177) しようと気持ちを変える¹⁰⁾。ローマの謝肉祭の直後、ナポリへと旅立ったゲーテは「眼前に浮かぶイメージを描写する器官」(MA15, 258) が自らに欠けていることを自覚した。そして「自然のいろいろな現象や様々な意見の錯綜」(MA15, 261) を理解して発展させようと望み、見ることを学ぶ内に、彼の「内部」は変容していく。「民衆と共に暮らしていると、なおいくらかの独特な楽しみがある。民衆はとても自然のままなので、彼らと一緒にいるとこちらにも自然のままになれるのだろう」(MA15, 265)。自らが変容することで、目に映る景色が変わる。1787年3月19日、ナポリの群衆の中を通り抜ける時の感覚をゲーテは記す。「かくも巨大な人込みの動きの中で僕は初めて真の静けさと孤独を感じる。通りの騒ぎが酷くなればなるほど、僕の心は落ち着くのだ」(MA15, 262)、と。外の騒々しさと内の静けさ。それがゲーテにローマの謝肉祭における自らの混乱の根源を突き止めさせるのである。「やはり世界は簡単な車輪に過ぎない。その外接円は全部どこも互いに均等であるのに、僕

たちに妙に思われるのは、自分たち自身も一緒に回転させられているからだ」(MA15, 261)。

更に詩人はパレルモで原理的なものを捉える。パレルモには「パラゴニア公子のナンセンス (Unsinn) と無軌道ぶり (Torheiten)」(MA15, 301) をはじめ、「作品を秩序づける芸術精神もなくただ偶然性によってのみ保たれた」(MA15, 292) ように当初は思われた。だが、そのような建築、自然、人間の観察を続ける中で彼は、観察対象とは逆に、人間内部に働く「調和的律動 (Eurhythmie) の土台でもある水平と垂直の感情」(MA15, 306) という「規範」を直観する。この規範こそ、後には「分極性」と「高揚」の思想へと高まっていった重要な要素にほかならない。「詩人的夢想」(MA15, 327) と戯れようと出かけた植物園への散歩の最中に浮かんだ彼の「原植物」の着想も、1787年4月17日、同じくシチリアはパレルモにおいてであった。しかし、ゲーテが「シチリアなしのイタリアでは僕の心の中に何のイメージも作りえない、ここにこそ全ての鍵があるのだ」(MA15, 313) と吐露するに至ったのは、必ずしも「自然」の「規範」を見出したからだというわけではなからう。まさにシチリアにおいて、ゲーテの「見る」と「書く」ことが密接に関連しはじめ、彼の自然学と詩学が渾然一体となりはじめた。だからこそ、ゲーテにとってシチリアでのイメージは重要だったのである¹¹⁾。そのような自然観察と詩的描写の一体化したゲーテの筆使いは〈叙述するまなざし〉と呼ばれるに相応しい。

彼のまなざしが捉えようとしたものはいかなるものであったのか。それは、ゲーテがシチリアにおいてしばしば想起したホメロス文学についての叙述によって示唆されている。例えば、1787年5月13日、メッシーナからナポリへ戻る最中のゲーテは、カリュプティスとスキラの前で「これらの二つの名所が自然では遠く離れて位置しているのに、詩人〔ホメロス〕によって近隣に寄せられている奇妙さ」を「詩人の虚構」と断定する人に対してホメロスを弁護する。「対象を意味深く表象したい時にはあらゆる人間の想像力が対象を広くというよりも、より高く捉え、形象により多くの個性、重大さ、尊厳を付与するものだ。(中略) 想像と現実の関係は詩と散文との関係に等しく、詩は対象を力強く、険しく考えるが、散文はいつも平面に広がろうとする」(MA15, 384)。『詩と真実』の続編たる『イタリア紀行』前半二冊も、本来の計画に則れば、ホメロス文学と同様に「詩人の虚構」であって実人生そのものではないという批判を招きかねない。だが、ゲーテにとって「真実」とは、「事物の完全な実在 (Dasein) からのみ生じる」「あらゆる有機的な存在物」の「印象」(LA2, 7) にほかならない¹²⁾。彼は『詩と真実』等の伝記的著作群の中で、ホメロスの叙述に倣い、自らの生の「真実」なる「印象」を「詩的」に叙述しようと試みたのであった。

だが他方でゲーテは、ホメロス文学との間にはもはや越えようのない隔絶があることを1787年5月17日付ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー (1744-1803) 宛書簡で打ち明けている。

ホメロスに関しては、目から鱗が落ちた気がする。叙述、比喩などは僕たちには詩的

に思われるがそれでいて言いようもなく自然で、しかもやはり、吃驚するほどの純粋さと直向きさが備わっている。極めて奇妙な虚構の出来事ですら、叙述された対象の近くでは、これまでに感じたことがないほど自然味を感じた。僕の考えを要約して表現するならこうだ。**彼らは存在を表現したが僕たちは普通、効果を表現する。彼らは怖ろしいものをありありと描写するが、僕たちは怖ろしく描写する。彼らは快いものを、僕たちは快く、等々である。**(MA15, 393)

たとい「詩的」であろうともギリシア人たちが「何か」を捉えたのに対し、ゲーテをはじめ近代人はそれを「いかに」捉えるかに苦心するという。彼はホメロスが描くような対象の叙述を意識して試みるのだが、そう事はうまく運ばない。彼は嘆く。「旅行というものが、やり遂げた人にとっては一つの流れをなして過ぎていくように思われ、想像力の中では連続する一まとめとして現れるものなら、真の報告は不可能だどうしても感じてしまう。物語る人は全て一つ一つ並べ立てねばならず、どうしたらそのような〔個別のもの〕の中から第三者の心の中には全体が形成されるというのだろうか」(MA15, 422)。「連続する一まとめ」を「全体」として伝える叙述は、ホメロスの描いた「存在」の表現に近い。そのような叙述を南方への旅で認識しえたゲーテには、再びローマに戻ってからも、もはや最初にローマに滞在したときの状態へは後戻りできない。ホメロスとの間に聳える断絶を乗り越えようと彼は挑戦を繰り返すのである。『第二次ローマ滞在』冒頭、1787年6月16日の記録は、ローマ近郊のティーヴォリ付近の滝の叙述の拒否から始まる。「第一級の自然と呼べる光景の一つ」(MA15, 425)、「地上的な事物の一つの頂点」(MA15, 425)と彼が呼ぶ「廃墟や風景全体を包括したその滝は、見るものの心の奥底まで豊かにするような対象である」(MA15, 425)。その風景の中でもとりわけ「複雑な滝の一つが極めて見事な作用を生み出している」(MA15, 426)。しかし「これ以上は何も言いたくない」(MA15, 426)とその滝の叙述を彼は拒絶するのである。また、1787年12月15日付ヘルダー宛書簡においてもゲーテは、フラスカティからロッカ・ディ・パーパを経てモンテ・カヴォへ登る途中に目にした素晴らしい景色に関して、それが「言葉も叙述も絶した」(MA15, 530)ものであるから「いつか素描画を送ろう」(MA15, 530)と文字にすることを拒否している。ホメロスの語る「存在」の表現をシチリアで認識したゲーテにとって、どれだけ「効果」を高めて表現しようとも対象自体を全体的に叙述することはできない。

そこでゲーテが対峙したのは絵画である。彼は、南方への旅からローマに戻るや「再び自然を観察」(MA15, 427)する。ただし、この時の「自然」とはいわゆる外界のものではなく、プーサン、クロード、サルヴァトーレ・ローザら「画家たちが発見ないし多かれ少なかれ模倣したもの」(MA15, 427)であった。描き出された「自然」を「再発見して読み解くこと」(MA15, 427)を試みるゲーテの狙いは、「魂が拡大、純化され、最後には自然と芸術とに関する彼らの最高の直感的な概念が付与される」(MA15, 427)ことにほかならない。そのような過程を踏んで初めて、「もはや言葉でも伝統でもなく、生き生きとした概念」(MA15, 427)を獲得することができるのだらうと彼は目論む。かつてゲーテが「執拗

な自然研究と、比較解剖学の研究に取りかかった時の用意周到さが、今、自然や古代美術品における諸々の事を全体の中で見ることを可能にする」(MA15, 469)。実際、ゲーテは1787年8月11日には「芸術は僕にとって第二の自然になりつつある」(MA15, 464)と自信を見せ、9月1日には「美術研究はとても前進している。僕の原理はいたるところに適合して、全てを説明してくれる」(MA15, 476)とまで口にする。彼にとって今や「高貴な芸術作品は同時に最高の自然作品」(MA15, 478)であり、「真実と自然の法則にしたがって人間によって生み出された」(MA15, 478)ものだと思われる。彼の芸術賛美は留まるところを知らない。彼は言う。「高貴な芸術作品」の中では「恣意的なもの、自惚れたものは全て崩壊する。そこには必然性がある。そこには神がある」(MA15, 478)、と。さらに彼はこうも言っている。「絵を描き芸術を研究することは文学能力を、妨げるどころか、援助する」(MA15, 530)。その成果を後にまとめた『自然の単純な模倣、手法、様式』(1789)の中で彼は、客観的な「自然の模倣」、「普遍的な言語を作りだそうと努力する」(MA3.2, 188)主観的な「手法」、さらには「精密かつ深い対象自体の研究」(MA3.2, 188)によって、「芸術が到達しうる最高位」(MA3.2, 188)である「様式」が確立されうることを段階的に述べた。1829年4月10日、エッカーマンの前でゲーテは「40歳のときイタリアで、自分には造形芸術の才能が欠けていること、だから自分の芸術への傾向は誤りであるということぐらいは自分自身について識別することができた」と告白したが、2日後の4月12日にそれを補足するように、自分の造形芸術への傾向は誤りであったがその活動のおかげで「洞察力を手に入れることができた」(MA19, 330)とも言っている。そのような芸術の洞察力を通じて彼は芸術作品を鑑賞し、その後、少なからぬ芸術論を世に問うた。彼は、イタリアにおいて自らの執筆家ないし詩人としての存在意義を改めて認識したのである。その意味においてゲーテは、実は、イタリアで芸術家としてではなく詩人としての「第二の誕生日」を迎えたのであった。帰国直前、1788年1月25日付カール・アウグスト公宛書簡において、彼は自分の旅を振り返りながら次のように報告する。

私が最初ローマに着いたときには、そもそも自分が芸術を全く理解しておらず、ただ芸術作品の中に描かれた一般的な自然の写し絵(Abglanz)を賛美しては楽しんでいただけであったことに気が付きました。ここ〔イタリア〕には、ある別種の自然、さらなる芸術の沃土が自分の前に広がっていたのです。いいえ、それは芸術の深淵でした。私は自分のまなざしを自然の深淵に慣れさせていただけに、より一層の喜びをもってその中を覗き込んだのです。(WA IV8, 328)

観察と表現の密接な連関については告白するゲーテだが、しかし彼は芸術論の中で、いわば自分の「コロンブスの卵」(MA15, 478)である「美術品を一挙に解き明かすように説明する自分の原理」(MA15, 478)を開陳しない。だが、彼の自然研究が芸術研究に役立ち、そして、彼の芸術研究が文学能力を援助するというのであれば、彼の自然研究からゲーテ文学を読み解く「親^{マスタースキー}鍵」(MA15, 478)を探ることも可能ではないか。

3. 「原植物」の想念と「自然」の叙述

1828年5月23日のゲーテの日記には、ヴァイマル宰相フリードリヒ・フォン・ミュラーからの問い合わせが記録されている。それは、「亡きアンナ・アマーリエ侯爵夫人の遺した書簡の中から見つかった自然哲学的論文」は「ゲーテが書いたものなのか否か」(WA III11, 222) というものであった。後に『自然』(1783)と題されることになったその文書¹³⁾について、ゲーテは翌日、ミュラーへの返答として執筆した「箴言的論文『自然』への注釈」¹⁴⁾の中で、「確かにこれらの考察を実際に自分が書いたとは思いつけないが、しかしそれは、私の精神が当時形成していた観念によく合致している」(LA11, 299)と述べた。さらに彼は続けて、「当時の洞察の段階」を「比較級」、後にたどり着いた晩年のゲーテの段階を「最上級」と表現しながら、自らの自然観の発展段階を叙述した(LA11, 299)。

本章では、彼自身のその叙述を基礎にしながら、イタリア滞在前後の時期におけるゲーテの自然観の展開を順に捉える。そのために、まず、ゲーテが「比較級」と見なした論文『自然』に目を向けておきたい。その自然論は以下のような箴言的文体で叙述されている。

自然は全てである。自然は自分自身を報い、自分自身を罰する。自分自身を喜ばせ、苦しめる。自然は粗暴で穏やかだ。愛らしく、しかも恐ろしい。無力かつ全能である。全ては常に自然の内に存在する。過去や未来を自然は知らない。現在が自然にとっての永遠である。自然は慈悲深い。(LA11, 4)

「最も不自然なものですら自然である」(LA11, 3)と同文書内で述べられる『自然』の記述に、ゲーテは「ある種の汎神論への傾向」(LA11, 299)を看取した。それは、「諸々の世界現象の根底に、究明し難く、絶対的で、滑稽で、自己矛盾する一つの存在」を考えていた思想で、それが「真面目な思考の戯れ」に値するとゲーテは認めるのである(LA11, 299)。しかし、「比較級」の段階と見なされた『自然』の叙述は、晩年のゲーテにおける重要な要素である「分極性」と「高揚」という「あらゆる自然の二大駆動輪の直観」(LA11, 299)を欠く¹⁵⁾。その欠陥こそ、ゲーテが「当時の洞察の段階」を「最上級」ではなく「比較級」と称した原因にほかならない。イタリアに旅立つ前で未だ「比較級」の段階にあった壮年のゲーテから、イタリア滞在を経て「最上級」の段階にたどり着いた晩年のゲーテへの変容は極めて大きい。

『自然』が執筆されたと考えられる頃に自分は比較解剖学研究に従事していたと、ゲーテは『注釈』で報告している。『比較骨学試論。上顎骨の間骨は人間と他の動物に共通であること』(1784)を執筆した彼は、1786年には、「人間に〔顎〕間骨(Zwischenknochen)が否認されてはならないという自分の確信」(LA11, 299)に対する関心を高めてもらおうと苦心していたらしい。だが、顎間骨は当時、動物界でより高位に立つ人間を他の動物と区別する科学的根拠として宗教的に認められていたため、「有能な人々」、「最も優れた観察者」ですら、人間の顎間骨の存在を認めず、否定し続ける。その結果、ゲーテは「黙々と

我が道を一人で前に進むほかなかった」(LA11, 300)¹⁶⁾。この研究の意義については、1795年頃に執筆され、後に『形態学』誌第二巻第二冊に掲載された『頭蓋が六つの椎骨から成ること』(1824)の冒頭において彼自身が述べているとおりであろう。すなわち、「人間にも間骨を認知することがとても重要であったのは、同時に骨学的原型の首尾一貫性があらゆる形態を徹して認められるからである」(LA9, 357)。実は、顎間骨の発見に関してはゲーテよりも先にフランスの解剖学者フェリックス・ヴィック・ダジール (Félix Vicq d'Aziry) が1780年に第一発見者になっている。しかし、ゲーテの顎間骨発見の意義は、彼自身が誇りとしていた間骨の発見自体ではなく、自然界における「原型の首尾一貫性」を見出したことにあった。「もし眼に映るものが自然の事物を指し示さないということであれば、私は、この骨の区分が人間においても同様に存在するのだと敢えて前に出て言うことに恥を覚えていたであろう」(LA9, 154)と『動物同様人間に上顎骨の間骨が認められること』(1786)の冒頭でゲーテが述べているとおり、彼は何よりも自分の眼を信じた。彼のまなざしは、動物界においてのみならず、自然界のあらゆる階層にその「原型」が共通していると捉えたのである。

ただしこのゲーテの思想を支える背景には、相矛盾する二つの思想の流れがあることに注意しておかねばならない。その一つは、プロティノス (205? -270?)、スピノザ (1632-1677)、ライプニッツ (1646-1716)、後にはシェリング (1775-1854) にまで至る新プラトン主義的汎神論である。「全一性」を探求する彼は、あらゆる存在の根底に「第一者」を考えていた。他方で彼は、リンネらが支持していた18世紀の自然観にも従っていた。その二つ目の自然観によれば、自然は「無機物」と「有機物」に区別され、「鉱物」、「植物」、「動物」といった階層をなす部分に分かれており、それぞれの自然物はその属する領域に相応しい言語を用いて表現されなければならない¹⁷⁾。だが、彼の中ではスピノザ的思想とリンネ的思想という二つの源流は一つのものであるとして消化されていた¹⁸⁾。1784年から1785年にかけて執筆され、ヴァイマル版全集で『スピノザ研究』と名付けられた論文の中で、彼はすでに「無限なもの」と「部分」の関連について「あらゆる限定された諸存在は無限なものの中にあってはいえ、無限なものの部分ではなく、それはむしろ無限性を分かち合う」(LA11, 6)と言及している。ここでいう「無限なもの」は、「第一者」を指し、「全体」ないし「自然」と換言することもできよう。それ故、ゲーテが『骨学試論』を添付した1784年11月17日付カール・ルートヴィヒ・フォン・クネーベル (1744-1834) 宛書簡において「あらゆる創造物は、一大調和の一つの音、一つの影でしかない。それは、全体なるもの、偉大なるものの中でも研究されねばならず、さもなければ個々のものは全て死んだ文字である」(WA IV6, 390)と発言する時、彼の探求した「原型」は自然界全体において共通する生の根源を指し示す。

それ故、「無機物」にも「有機物」にも「原型」は見出されうる。「無機物」である岩石 (Gebirge / Gestein)¹⁹⁾ に関してもゲーテは、1784年から1785年にかけて執筆された『花崗岩について』の中で、「最高最深のものが花崗岩 (Granit) であり」「この岩石こそ我々の地球の基盤である」(LA11, 11)と述べ、花崗岩を「原岩石」Urgebirge と認めている。とはい

え地質学においてゲーテの立場は揺らいでいた。原初においてはまず花崗岩が岩石生成水の内に現れて地球の最内奥で確固として存し、その上に他の全ての多種多様な岩石が形成されたので、花崗岩の峰が隆起したときに周りを取り巻いていた全ての岩石と岩石生成水がその頂にまで到達することはなかった、という見解を確かに彼は持っていた。しかし「その根源が火であるのか水であるのかを導き出すことはほとんど許されていない」(LA11, 11)。岩石に関しては、その後も、当時の学界を二分していた水成論と火成論の論争の渦中でゲーテは最後まで自らの立場を完全には決定できなかったのである²⁰⁾。

ゲーテが「原型」を探求する中で転機が訪れたのはイタリアにおいて、ドイツには植生していない多様な植物を新たに観察している時のことであった²¹⁾。「あらゆる植物の形態はおそらく一つの形態から発展させうるのだという考え」(MA15, 69)²²⁾に執着していたゲーテは、1787年4月17日、シチリアの植物園を散歩している時に「原植物」の着想に再び捕われる。「これらの多数〔の植物〕の中で原植物を発見できないものか。そのような植物が一つ、どうしてもあるに違いない。さもなければ、あれやこれやの形象(Gebilde)が植物だとして自分には分かるのだろう。それらが全て一つの規範に倣って形成されているのでなければ」(MA15, 327 u. 455)。さらに、1787年5月17日にはナポリから、ヘルダーに宛てた書簡でも「原植物」についてゲーテは述べている。「原植物は世界の中でも極めて驚くべき創造物なので、これに関しては自然自体が僕をうらやんでしかるべきだ。〔中略〕原植物は、たとい存在しなくとも存在する可能性はあるわけで、何か絵画的なものや文学的な影、仮象ではなく、一つの内的な真実と必然性を持つものなのである。同様の法則は他のあらゆる生物に適用されうるだろう」(MA15, 394 u. 456)。これら二つの発言はまず『第二部』に掲載されたのだが、1787年6月にローマに戻ってからの記録になる『第二次ローマ滞在』においても「原植物」に対する注意を喚起するために、最晩年のゲーテは(句読点の変更以外全く筆を入れずに)再掲載した。それに続けて彼は、1787年7月の「報告」で以下のように「原植物」の着想をまとめている。

つまり自分に明らかになったのは、我々が普段は葉と見なしている植物のこの同一器官の中に、変幻自在に身を隠したり現れたりできる真のプロテウスが秘密裏に潜んでいるということだ。前後とも常に植物は葉であり、将来の発芽(Keim)と別ち難く一体化しているので一方をもう一方なしで考えてはならない。(MA15, 456)

「原植物」を幻視したゲーテは、1787年9月6日、ヘルダーの『神についての対話』(1787)に「自然の事物の中でさらに推し進んでいくように鼓舞」(MA15, 478)されたことを報告する。「そこ〔自然の事物の中〕で僕は、特に植物学においては、ヘン・カイ・パーン(έν και πάν, 一にして全なるもの)に到達したが、僕は驚愕している。それがどこまで広がっていくことができるのか、僕自身にもまだ見えないのだ」(MA15, 478)。植物界における生の根源を「原植物」として把握したゲーテは、そこからさらに自然界全体における「メタモルフォーゼ」の思想を展開させていった。「原型」と「メタモルフォーゼ」

の思想は、以後の彼の自然学的まなごしの根底に常に潜む²³⁾。すなわち、イタリアにおいてゲーテが自ら「原植物」に対する実感を懐きえたことこそ、将来的に形態学や色彩学の研究へと繋がった、彼の変容の転機にほかならないのである。「原型」こそ、ゲーテとしての「親鍵」の一つであった。

「1788年、シチリアにおいて幸運にも植物のメタモルフォーゼを直観的にも概念的にも獲得しえた」(LA11, 300) ゲーテは、イタリアからの帰国後すぐに、『植物の変態を説明する試み』(1789成立、1790刊)を書き上げた²⁴⁾。実は、彼にとってそれが自然科学分野における初めての出版書である。その中で彼は、葉という「同一器官を植物が次第に変形させていく力の表出」(LA9, 48: 84)に着目しながら、それを段階的に叙述した。(1) まず「植物が種子の外皮を破って出てくる瞬間」に注目すると、「根が地中にその身を固定」した後、「すでに種子の覆いの中に隠れて存在していた地上成長のはじめの諸器官」である子葉を、植物は「光の方へ生み出す」(LA9, 25: 10)。(2) 茎葉がそれに続き、「さらなる形成はとどまることなく結節から結節へと広がる」(LA9, 28: 20)。(3) 観察者の目は、その形成の広がりから花序と萼で凝縮する点を見逃さない。「茎は、最後に形成された葉から突然長く精妙になって高くへ移り、その先端にいくつもの葉を〔茎の中心〕軸の周りに集める」(LA9, 31f.: 31)。(4) そして、その凝縮した萼から「花冠がまたしても拡張によって生み出されるのである」(LA9, 35: 41)。(5) さらに、「花冠として広がる様を見てきたこの器官が再び最高に収縮し、同時に、最高に精妙にされた状態で姿を現すとき、雄蕊が生ずる」(LA9, 37: 50)。生殖器官であるその葯から放出された花粉ないし精妙な汁液が、雄蕊同様に収縮して生じた雌蕊と吻合(Anastomose)する時(Vgl. LA9, 42f.: 69)、「最初には本当に分離していたそれら二つの植物の部分が結合」(LA9, 42: 66)し、実が結ばれる。(6) その結果として生じる果実を「最大の拡張」とするならば、種子こそ「最大の収縮」にほかならない(LA9, 44: 73)。その内部に子葉を孕む種子は「収縮と内部形成の最高段階」(LA9, 47: 82)なのである。そして種子は次の芽吹きを待つ。このような植物の「メタモルフォーゼ」の円環を順に叙述した後で、最後にゲーテは、その円環がやはり葉という「同一の器官」が形成したものであることに注意を促すことも忘れない。

植物は発芽し、開花し、あるいは実を結ぶにしても、しかしそれらは常に、まさに——多様な用途で、多くの場合は変形した姿で、自然の規定を満たしている——**同一の器官**でしかない。茎においては葉として自らを拡張し、極めて変化に富んだ形姿を呈したその同一器官が、今度は萼において収縮し、花卉において再び拡張し、生殖器官において収縮し、最後には果実として拡張するのである。(LA9, 59)

以上のとおりゲーテは植物の生長を、あたかも呼吸するかのように拡張と収縮の段階が繰り返される六段階に捉え、葉の「メタモルフォーゼ」として叙述した。しかし、逆に捉えれば、ゲーテは「原植物」という「原型」をそのような段階を追った叙述によってしか表現できなかったのだと言える。『植物変態論』の中に、「原植物」Urpflanzeという言葉が

一度も出てこないからである。それ故、「原植物」が詩的にしかとらえられないホメロスのな実在とするならば、「メタモルフォーゼ」は近代人の叙述方法だと認識することもできるだろう。「原型」と「メタモルフォーゼ」の間にはまだ越えがたい隔絶がある。

後にゲーテは「原植物」に関するある出来事を極めて劇的な形で表現した。それは『幸運な出来事』（1817）の中に見出される、かの有名なくだりである。1794年7月のイエーナにおける自然科学の会合後、帰る道すがら、ゲーテは『植物変態論』を説明するために「ある象徴的な植物」をシラーに書いて見せた。するとシラーは言う。「それは経験（Erfahrung）ではなく理念（Idee）です」。その言葉にゲーテは一瞬「たじろいだ」が、すぐに次のように応じたという。「私が理念をそれと知らずに懐いており、しかもその上、眼で見ているということは自分にとってとても好ましいことです」、と（LA9, 81f.）。この場面面でゲーテが「たじろいだ」瞬間を敢えて記している点を見逃してはならない。シラーに指摘されるまではゲーテ自身も「原植物」が経験か理念かの区別をしていなかったのではないかと思わせるまさに彼のこの筆遣いこそが、実は彼が「原植物」は叙述不可能だと密かに感じていたことを逆説的に示すのだ。事実、『植物変態論』の中で彼は「原植物」を葉の「メタモルフォーゼ」の叙述によってしか捉えられなかったのである。

ところで、『植物変態論』の中では詳述されることがほとんどなかった「根」が、「葉」に對置される「闇」の部分であるとすれば²⁵⁾、「葉」は「光」に向かって生長する部分であると捉えられる。地下へ向かう、マイナスの力を収縮ないし凝縮、そこから解放されようと天へと向かうプラスの力を拡張と捉えるならば²⁶⁾、そこには、ゲーテが後に主張する「分極性」と「高揚」の萌芽を認めることができるだろう。深く、あるいは確りと地に根を張れば、植物は高く、そして崇高に成長する。光と闇という対極の間で闘ぎ合う動きこそ、高みへと導く力にほかならない。そこにファウストとメフィストフェレスのドラマトルギーを重ねて看取することもできよう。さらに「メタモルフォーゼ」という思想は、後にゲーテが『注解』の中で「最上級」と呼んだ「分極性」と「高揚」の認識段階に向かい、「根源現象」の内に一般化され、『色彩論』（1790-1810成立）へと受け継がれる。

『色彩論』においてゲーテは、眼は光も闇も捉えることがないと述べ、冒頭でそれらの直接的な叙述を断絶している（LA4, 3）。ゲーテによると、眼が捉えるのは光と闇の対立が「曇り」に生じた色彩だけである。「曇り」を通すと光は黄色として眼に映り、また闇は青色として眼に映る。それら分極は、「曇り」が濃くなることによって「高揚」し、それぞれが橙色と紫色に向かって変容する。また、黄色と青色の混合は緑色を生じ、橙色と紫色の結合は赤色を生ずる。赤紫青緑黄橙という六色の一円からなる「色彩環」は、ゲーテにとって具体的な色彩現象が同時に、「分極性」と「高揚」から成る理論でもありえたことを明示する証左なのである。眼は「曇り」なしに世界を視覚できない。「曇り」の内には相反するものが同時に存在しうる。そして光と闇の対立が「曇り」に生じて視覚化される全色彩現象の生動性（Lebendigkeit）に彼は美を認める。「曇り」という媒体を介して展開される無限の色彩の考察によって『色彩論』の著者は、「色彩環」というモデルの内に自然における「根源現象」を構造的に叙述するのである²⁷⁾。そのような認識が基盤にある晩年以降のゲー

テ文学の内に、本論は〈「曇り」の叙述形式〉を認めたい。確かに近代ではもはや存在の本質を表す直接的叙述は不可能かもしれない。しかし〈「曇り」の叙述形式〉は、「曇り」の妨害によって存在自体の直接的把握を不可能にする一方で、同時に存在の全体的把握を援助する。つまり、直接捉えられないものを人間が捉えられるようにするためにゲーテは、妨害と援助を同時に存立させる「曇り」という媒体を案出したのだ。そのようなゲーテの自然学的認識こそ、彼の晩年以降の文学の根底に潜む叙述形式の特徴にほかならない。

4. 叙述不可能なものを叙述するゲーテの試み

『色彩論』執筆後のゲーテ文学は芸術観と自然観が融合している点に最大の特徴と魅力を持つ。それだけにイタリア体験が果たした役割は実に大きい。イタリアでゲーテは2年間「絶え間なく観察、収集、思索」(LA9, 62)し続けた。彼は『手稿の運命』の中でその成果を三つ紹介している。第一は『自然の単純な模倣、手法、様式』(1789)²⁸⁾である。それはゲーテが「次第に全体を見渡す希望、先入観のない純粋な芸術享受を自分に準備する希望が持てるようになった」(LA9, 62)ことを裏付ける。第二はいわゆる『植物変態論』と呼ばれる『植物の変態を説明する試み』で、その中で彼は、表面的にはどんなに多様な姿を見せようとも常に「自然は法則的に事を進めているのだ」(LA9, 62)という自然認識を開陳した。これらについては本論でもすでに詳述したとおりであるが、本章では、ゲーテが従事した「諸民族の流俗」(LA9, 62)という第三の研究成果、『ローマの謝肉祭』を考察する。その叙述こそ晩年のゲーテ文学の嚆矢と見做しうるだろう。というのもこの三著作は全く同じ時期に成立し、ゲーテの思索は芸術学、自然学、文学の三分野を行き交っていたため、『ローマの謝肉祭』は当然のように他分野との緊密な連関を保持しているからである。「こうして熟慮は整理され、経験は秩序付けられ、瞬間は確と保持された」(LA9, 62)。すなわち、彼が『ローマの謝肉祭』において「瞬間」の叙述を成し遂げられたのは、まさに芸術学および自然学的基盤のおかげだったのである。

それでは詩人が民衆の観察によって得た「瞬間」とは一体いかなるものであったのか。

必然と恣意、衝動と意志、運動と抵抗のぶつかりあいから第三のものが生じる。それは芸術でも自然でもなく、むしろ同時にそれら両方である、必然的かつ偶発的に、意図的かつ盲目的に。(LA9, 62)

「第三のもの」の認識によって、ゲーテは「人間社会を理解」(LA9, 62)し、『ローマの謝肉祭』を叙述するに至ったという。いわゆる自然を「第一のもの」とすれば、彼はイタリアにおいて芸術の中に「第二の自然」を見出し、自然・客観的なものが人工・主観的なものによって「様式」の内に顕現する芸術作品をゲーテは「第二のもの」と捉えた。そのような「第一のもの」でも「第二のもの」でもなく「むしろ同時にそれら両方」である点にゲーテは「第三のもの」の特徴を挙げる。それ故、相反するものを也包括しうる『ロー

マの謝肉祭』の認識には〈「曇り」の叙述形式〉の萌芽が見出されるのである。

「ローマのカーニヴァルは、そもそも民衆に与えられている祭ではなく、**民衆が自らに与える祭**である」(MA3.2, 218)。民衆たちは「皆、観覧しに、あるいは観覧されにやって来る」(MA3.2, 220)。「皆が出かけてくるのは、各自が各々で楽しみ、愚行を晒してはこの数日間の自由を最高に享受しようとするためである」(MA3.2, 227)。このような民衆の姿勢にこそ、能動と受動の相まじりあった相反一致の様相が見出されるだろう。その具現化した民衆の姿は、一例を挙げれば、「二つの仮面を付けて雑踏の中にいて、どちらが彼の前側でどちらが後ろ側か、彼は来るのかあるいは行くのか分からない」(MA3.2, 229)と描写されるとおりである。ただし、謝肉祭は民衆にとって「そもそも日常的な日曜祭日の楽しみの延長ないし頂点」(MA3.2, 220)であることを忘れてはならない。「何も目新しいものはなく、何も知らないことはなく、何も独特なものはない。むしろ祭はローマ人の暮らしぶりに極めて自然に接続するだけだ」(MA3.2, 220)。カーニヴァルの中では、相反する両極が一致して現れる。そこでは、聖俗、賢愚、真偽、新旧、明暗、高低、前後等、正反対にある両極が容易に反転しうる²⁹⁾。その反転こそ内実を真に映し出す鏡である。ゲーテのまなざしとその虚像を真と見なしうるのは、彼がイタリアにおいては「外国人」であるからなのかもしれない。「外国人であることが彼らにとっては一つの仮面となるのである」(MA3.2, 229)。ゲーテは「仮面」を被りながら謝肉祭を観察する。「直接目の前で動いているもの」であり、「各々が各自各流に直観し把握すべきもの」である「大きく生き生きとした塊である感覚的対象」をゲーテは、静と動、生と死、「物質的と精神的、ありきたりなものとありえないもの、不快と魅力、有限と無限」といった「最も極端な相反が内部で合一している人間の本性の、不可思議な錯綜」として描いた(MA15, 558)。晩年のゲーテは、「このような矛盾が一人の優れた人間の内部に生じて明るみに出るとき、いかにその矛盾が、そこに迫り寄る不可解さによって悟性を惑わすか、想像力を解放し、信仰を凌駕し、迷信を是認し、それによって自然の状態を極めて不自然なものと直接接触させ、否、一致させるかを考えてみよ」(MA15, 558)と諭す。叙述不可能な対象をありありと描写しようと試みるそのようなゲーテの「叙述」の根底にあった願いは『ローマの謝肉祭』の最後に語られたとおりであろう。「人生は**全体**においてローマの謝肉祭のように見通しの付かない、享受できない、いやそれどころか、容易ならぬものであり続けるのだから、この無頓着な仮装者の集まりを通じて、瞬間的な、しばしば大して重要でないように思われるもろもろの生の楽しみの重要性を、皆が我々とともに想起して欲しい」(MA3.2, 250)、と。彼の謝肉祭の叙述には一つの「全体」が宿っている。一であり同時に多でもある「全体」は一つの「生」を享受している。ゲーテはまさにそのような「生」の「全体」を(あるいは「全体」の「生」を)叙述しようと試みていたのだ³⁰⁾。

だが、確かに彼は『ローマの謝肉祭』によって祝祭における民衆の「生」の「全体」というべきものを叙述することには成功したかもしれないが、果たしてその核心まで叙述することは本当にできたのだろうか。『植物変態論』の中に「原植物」という言葉が一度も刻み込まれることがなかったのと同じく、祝祭における「生」の「全体」を表す核心的な言

葉も『ローマの謝肉祭』に存在しない。「原植物」が、確かに認識されているが、そして口外されながらも決して『植物変態論』の中で叙述されることがなかったように、『ローマの謝肉祭』の中でも「原人間」と表すべき想念はゲーテによって叙述されえなかった。それにもかかわらず『植物変態論』も『ローマの謝肉祭』も公刊されている。確かにたどりつきながら、しかし叙述されることのなかったそのような想念は、ゲーテが言う「ひらめき」^{アペルシユ}（Aperçu (MA16, 725)）なのであろう。「ひらめき」についてゲーテは、彼の死後の刊行となった『詩と真実』第四部第十六巻に以下のように述べている。

いわゆる覚醒、回心、（中略）、本来、それは我々が学術的、詩学的な事柄においてひらめきと呼んでいるものである。それは、偉大な格率の知覚化であり、その知覚化は常に天才的な精神活動である。人は、熟慮によってでも教義や伝承によってでもなく、観察（Anschauung）によってそこに到達する。ここでそれは道徳的な力の知覚化であり、そのような力は信仰において錨となり、大波の只中でも、とても誇らしい安心感を覚えるだろう。

そのようなひらめきは発見者に極めて大きな喜びを与える。というのもそれは独特の方法で無限なものを示唆するからである。それは確信に至るまでに時間的継起を必要とせず、全てが生じると一瞬の内に完成するのである。（MA16, 725f.）

ゲーテは『ローマの謝肉祭』によって「瞬間」を保持しようと努めた。だが彼は、「生」ないし「全体」の根源的なもの、核心的なものの直観を叙述しようと試みてはいたが、結局、自らの自然学的著作の中で直接的に叙述することはなかった。彼はそれを、周りを埋めながら中心に迫るかのよう^{いかり}に語ったにすぎない。それこそが、叙述不可能なものを叙述する彼にとっての試みが採った叙述方法にほかならなかった。決して人間の感覚器官の限界を越えることなく、しかし確かに核心に存在するものを彼の叙述形式は伝えることに成功している。その叙述方法は、ゲーテ自身が『色彩論』の「序言」において、光の本質が叙述不可能であることを人間の性格描写に喩えながら説明しているとおりのものであろう。

というのも本来、我々がある事物の本質を表現しようと試みても無駄だからだ。諸作用なら我々は知覚できるであろうし、その様々な作用を完全に物語るなら、おそらくどうか事物の本質を包括するかもしれない。ある人間の性格を描写しようと骨を折るのも草臥れ儲けである。反対にその人の行動、行為をまとめてみよう。そうすればその個性のイメージが我々にふと浮かぶであろう。（LA4, 3）

つまり事物ないし存在の本質を直接的に書くことはできないが、しかし包括的な、あるいは段階的な叙述により、事物自体とその本質を叙述に含ませることはできると彼は目論んだのである。ところがそのような自然学的叙述方法は、彼の文学作品においては有効に

働いたのだが、彼の自然学的著作においては公刊当初から素人的なものと思われてしまふ。詩人の自然学的叙述の試みが真に理解されるまでには長い時間を待つ必要があった。

そもそも彼が叙述しようと試みた叙述不可能なものは「全体」、すなわち「自然」にほかならない。『ファウスト第一部』における「地霊」のごとく、生に限定された人間が生死を内包する「自然」の「全体」を把握することは本来的に不可能である。その意味で、相反するものどうしが自らの境界を自由に超えることのできる謝肉祭を叙述することは、彼にとって特別な行為であった。1787年、最初に謝肉祭を目の当たりにした時の「苦痛」(MA15, 209)をゲーテは『第二次ローマ滞在』の中で次のように記す。「ローマの謝肉祭は、一度見てしまえば、もう二度と見たいという気はしなくなる。これについて書くことは何もない。口で説明するのなら場合によっては楽しいかもしれないが」(MA15, 210)と。ローマのカーニヴァルを初体験したゲーテは、拒絶反応を示し、それについて「書くこと」ができない。『ローマの謝肉祭』は体験と言葉が同じ瞬間になければ不可能な〈一回性〉の特質を持つ叙述であった。その叙述が可能となったのは、ナポリ、シチリアへの旅行を通じ、詩人の意識もまた「自然」の状態に移行しえたからであろう。初めてのローマ滞在において「純粋な観察と直接の洞察」(MA15, 122)を得ようと没頭していたゲーテとは一変して、南方への旅中で彼は生き生きとした民衆に囲まれることで「ひたすら生きたく」(MA15, 257)になったらしい。「書物も絵画も与えてくれない感覚的な印象」(MA15, 25)に身を任せた詩人は、そこで民衆も町も遺跡も芸術作品も、自己も含めて全てが「自然」の一部であることに気づき、その瞬間、彼の中で何かが変わった。「原植物」を幻視したのもその時である。彼は「内部」まで観る力を手に入れた。その後ローマに帰還したゲーテは、「この一年、ローマで気品の備わった事物を研究してそれに慣れていた精神は、ここは自分のいるべき場所ではないのだということに今更ながら気づいたようだ」(MA15, 612)と述べながらも、「本当に落ち着いた、純粋な気持ちで」(MA15, 609)民衆とその祭を観察し、生き生きとした人間たちの姿にも「自然」に相通ずるものを看取する。二度目の謝肉祭でゲーテは、仮装して大騒ぎを楽しむ民衆とこの祭全体の「きわめて不快な、怖ろしい印象」(MA15, 612)を、「自然」の観察記録のごとく包括的に叙述することに成功した。『ローマの謝肉祭』には、ゲーテが人間ないし人間社会の内に直観した「自然」が潜むのである。

だが『ローマの謝肉祭』は、時を経て『第二次ローマ滞在』に再録された段階で、さらに役割を変えたに違いない。『第二次ローマ滞在』に挿入されたことで『ローマの謝肉祭』は、祝祭についての叙述からゲーテ自身の心象風景を表すものへと変容したからである。今やゲーテはその内実を「自然」として俯瞰できるようになったはずだ。『ローマの謝肉祭』の叙述は〈繰り返される一回性〉という文学的普遍性を獲得した。この特性は、ゲーテが自身と自らの作品とを「自然」と見なした証にほかならない。まさに『第二次ローマ滞在』に再び取り上げられた謝肉祭の叙述こそが晩年のゲーテの詩作、創作への転換点をなしたことが明らかになる。『ローマの謝肉祭』の叙述は晩年以降のゲーテ文学の萌芽なのである。それ故、『第二部』が詩人の叙述不可能性を認識するまでの過程を追った書であると言うなら、『第二次ローマ滞在』は叙述不可能なものを包括的に叙述する試みによって自

らの内に潜む「自然」の規範と内実を捉えようとした書だと言えよう。その叙述のために詩人は「物語」を要した。『ローマの謝肉祭』こそ、『イタリア紀行』における〈叙述不可能なものを叙述する試み〉という彼の「物語」の核心なのである。

もともと『ローマの謝肉祭』は、その祝祭を見られない人や楽しむことができないでいる人にその楽しさと本質を伝えようとする意図を持つ書物であった。いわば、見えないものを見えるように伝えることに当初の目的があったと言えよう。しかし、後年、フランス革命の影響によってローマで当時と同じ謝肉祭が開催されることがなくなってからは³¹⁾、祝祭を見られなかった人にも、もはや見られないものを見えるようにする書物へと変容した。さらに、『第二次ローマ滞在』に再掲載され、この著書が執筆者ゲーテの人生において位置づけられるに至ってからは、ただの旅行案内書ではなくなった。それはゲーテの生の一部として位置付けられ、ゲーテという「自然」へと変容したのだ。それ故、読者が『第二次ローマ滞在』所収の『ローマの謝肉祭』を読むとき、その読書行為は、実際にはもはや失われてしまった祝祭体験そのものを意味するにとどまらず、ゲーテの「内部」に存する「自然」の詩的真實に触れる機会となる。ゲーテの「自然」の叙述は段階を追って進められ、円環の内に一望されうる。詩人は「生」を植物の「メタモルフォーゼ」に喩えながら、まさに〈叙述不可能なものを叙述する試み〉によって、変容の内奥に働く生の規範、生の一貫性を洞察した。「メタモルフォーゼ」の叙述形式は、段階を追うように叙述される『ローマの謝肉祭』にも相通するのである。確かに『ローマの謝肉祭』は「〈最良の生〉の叙述」ではないかもしれないが、しかし、〈叙述不可能なものを叙述する試み〉として「生の〈最良の叙述〉」であったはずだ。それこそまさに『第二次ローマ滞在』、ひいては『イタリア紀行』全体の「物語」ともなった晩年以降のゲーテ文学の特徴なのである。

注

- 1) 本論はゲーテの一次文献に関して主に下記のテキストを使用した。引用の際は省略記号の後に巻数と頁数を添える。引用した原文の、**隔字**は太字に変更し、**斜字体**^{イタリック}は斜字体太字にした。

WA Goethe, J. W. v.: *Goethes Werke*. Abteilungen I - IV. 133 Bde. (in 143). Weimar 1887-1919. (Weimarer Ausgabe) [Dsgl. fotomechanischer Nachdruck: München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1987]

MA Goethe, J. W. v.: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. 21 Bde. (in 26). München: Carl Hanser Verlag 1985-1998. (Münchener Ausgabe)

LA Goethe, J. W. v.: *Die Schriften zur Naturwissenschaft*. Abteilung. 1. u. 2. Hrsg. von Dorothea Kuhn und Wolf von Engelhardt. Weimar: Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger 1947ff. (Leopoldina Ausgabe)

訳出の際には、ハンブルク版 (HA)、フランクフルト版 (FA) 『ゲーテ全集』、ならびに下記の既訳を適宜参照した。

『ゲーテ全集』全15巻、潮出版社、1979-1992年。

エッカーマン『ゲーテとの対話』（上、中、下）、山下肇訳、岩波書店、1968-69年。

木村直司編訳『ゲーテ形態学論集』（植物編、動物編）、ちくま学芸文庫、2009年。

木村直司編訳『ゲーテ地質学論集』（鉱物編、気象編）、ちくま学芸文庫、2010年。

- 2) 実は、彼の旅立ちは用意周到に計画されたものであった。実務にも長けた彼のイタリア逃避行の出立は、同年6月から交渉を続けていたゲッシェン社との新しい『ゲーテ著作集』出版契約に署名したまさにその翌朝のことであったのである。
- 3) 当時、ゲーテに無断で出版された海賊版ゲーテ全集は既に五種類も世に出回っており、海賊版ゲーテ全集で儲けたヒンブルク社がさらに新版を出す予定であることを伝え聞いたゲーテは、自らの編集で『著作集』を刊行することを決意した。これまでに執筆した六巻分の原稿をカールスバートで編集したゲーテは、残りの三巻に『ファウスト』などの新作をイタリアで完成させて掲載することにするのである。ただし実際には『ファウスト』は完成にまで至らず、『ファウスト断片』として出版された。
- 4) 『第二次ローマ滞在』には「1787年6月から1788年4月まで」の記録であることが副題に付されている。なお、本論では、ゲーテのイタリア滞在時期を壮年期、『色彩論』（1810）出版後、『詩と真実』『第二部』をはじめとした伝記的著述を執筆開始してからの時期を晩年、『ファウスト 第二部』（1825-31成立、32没後刊）や『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（決定稿1829）の執筆開始から永年までを最晩年と区分する。
- 5) ゲーテのイタリアにおける変容ないし「発展の理念」について詳しくはハリアネロ・マリアネリの論を参照。Vgl. Marianelli, Marianello: *Die Idee der Entwicklung im Siegel von Goethes „Italienischer Reise“*. In: Goethe Jahrbuch. Bd. 99. Weimar 1982, S. 117-132.
- 6) 本論において引用する『ローマの謝肉祭』の出典は、『第二次ローマ滞在』再掲載の当該箇所（MA15, 572-607）ではなく、1788年初出テキスト（MA3.2, 217-270）に拠る。
- 7) ゲーテは『色彩論』（1810）の刊行後、自伝執筆に取り掛かった。上述した『我が人生より 詩と真実』、『イタリア紀行』の他にも『フランス戦役』（1821成立、1822刊）、『マインツ攻囲』（1821成立、1822刊）、『年代記』（1825成立、1830刊）などの著述がある。
- 8) なお、『第二次ローマ滞在』への再録に当たって『ローマの謝肉祭』には、正書法、誤植の訂正、句読点の変更、図版の有無による二文削除の他は全く変更が施されていない。しかし本論第四章で述べるとおり、時を経て『イタリア紀行』に取り上げられたことによってその役割が変わるのである。
- 9) Vgl. Osterkamp, Ernst: *Im Buchstabenbilde. Studien zum Verfahren Goethescher Bildbeschreibungen*. Stuttgart 1991, S. 319.

- 10) ここで述べられる「道徳的」という言葉の用法はスピノザの「自然」概念と関係する。中井真之『ゲーテ『親和力』における「倫理的なもの」——F・H・ヤコービの「スピノザ主義」批判との関連において』（鳥影社、2010年）参照。
- 11) 幼少のころからゲーテは父のイタリア体験の影響を強く受けてきた。父ヨーハン・カスパール・ゲーテが、イタリアからの帰国後、自らの『イタリア紀行1740年』をイタリア人ドメニコ・ジョヴィナッチの手を借りてイタリア語による旅日記を執筆していた様子は『詩と真実』第一巻に述べられている（Vgl. MA16, 17）。『イタリア紀行1740年』によると、父はシチリアに足を踏み入れていない。Vgl. Goethe, Johann Caspar: *Viaggio per l'Italia. Manuskript der Italienreise aus dem Jahre 1740*. Hrsg. von Arturo Farinelli. 2 Bde. Rom 1932f.; ders.: *Reise durch Italien im Jahre 1740*. Hrsg. von der Deutsch-Italienischen Vereinigung. Frankfurt am Main. Übersetzt und kommentiert von Albert Meier. München 1986.ゲーテの「シチリアでの〈父の凌駕〉」についてはすでに高橋明彦が精神分析的観点から指摘している。高橋明彦『ゲーテ『イタリア紀行』の光と翳』（青土社、2011年、141-150頁）参照。
- 12) 引用箇所は若きゲーテの『スピノザ研究』からで、以下のとおりである。「あらゆる有機的な存在物が個的にも他との繋がりにおいても我々に与える印象、それが事物の完全な実在からのみ生じる時に、そのような印象を我々は真実と呼ぶ」（LA2, 7）。ゲーテにとって「真実」とは事物の「印象」にとどまる。ただし、その「印象」は他とのあらゆる繋がりを保つ「全体」を暗示するものでなければならない。ちなみに、この文章の直後には「美」についても述べられている。「そしてこの実在が部分的には、我々が容易に理解できる方法で限定されており、我々が喜んで捉えたいと思うような関係に我々の本性に対してある時に、我々はその対象を美と呼ぶのである」（LA2, 7f.）。ゲーテにとって「美」もまた概念ではなく、むしろ自然の内に見出される「有機的な存在物」の「喜んで捉えたいと思うような」「印象」である。
- 13) 箴言的論文『自然』は、アンナ・アマーリエ侯爵夫人の夏の居城において編集され手書きで配られたヴァイマルの雑誌『ティーフルト・ジャーナル』第32号（1783年）に、「断片」という題で掲載された。ゲーテが手にした原稿は、1780年代に彼が書記として使っていたザイデルの筆跡である。なお、執筆者は匿名であったが、1783年3月3日付クネーベル宛書簡でゲーテは、その原稿は「私の書いたものではありませんし、誰が書いたのかはこれまで秘密にしました。しかし、執筆者が私と交流を持ち、この対象については幾度も話し合ったことは否定しません」（WA IV6, 134）と記した。そのクネーベルに宛ててシュタイン夫人は1783年3月28日付書簡で執筆者を予想し（WA IV6, 440）、第二次スイス旅行でゲーテと知り合って1781年3月から11月までヴァイマルに滞在していたスイスの神学者ゲオルク・クリストフ・トープラー（1757-1812）であろうと述べている。しかし、後年のさらなる文献学的研究の結果、この文書が、トープラーが後

- 期ヘレニズムの第10のオルフェウス賛歌をギリシア語からドイツ語に散文訳したものであることが判明した。(Vgl. MA2. 2, 872ff. u. MA18.2, 1219ff.)
- 14) 上の注に述べたとおり、箴言的論文『自然』は本来「断片」として掲載された原稿である。決定版ゲーテ全集である『最後の手の全集』(1833) 編集時にはこの題名について議論され、最終的にエッカーマンが「自然。箴言的に」と命名した(Vgl. MA18.2, 1220)。現在では『自然。断片』と併記される。また、これについてのゲーテの「注釈」も、もともとミュラー宛書簡の添付書類であったために、後にハンプルク版編集者エーリヒ・トゥルンツが題目を付けて掲載したものである。本論では以下、後者を『注釈』と略記する。
 - 15) 『注釈』の中でのゲーテの説明によると、「分極性」は「我々が自然を物質的と考える限り物質」に属する「恒常的な牽引 (Anziehen) と反発 (Abstoßen)」であり、「高揚」は「我々が自然を精神的と考える限りそれ〔物質〕と反対のもの〔精神〕」に属する、「常にひたすら志向する (immerstrebend) 上昇」である。しかし、「物質は精神なしに、精神は物質なしに、決して存在することも作用することもできないので、物質もまた高揚することができ、精神は牽引と反発を止めることができない」(LA11, 299)。
 - 16) この比較解剖学試論は、1820年の『形態学』誌第一巻第二冊に初めて印刷公表された。その意義が認められたのは、自然科学アカデミー「レオポルディーナ」の年次報告に五枚の図版とともに掲載された、1831年のことである。なお、ドイツ語のいわゆる「顎間骨」Zwischenkieferknochen という言葉をゲーテはほとんど使っておらず、テキストではラテン語表記 (Os intermaxillare) か、「間骨」Zwischenknochen と記される。
 - 17) Vgl. Pörksen, Uwe: *Goethes Kritik naturwissenschaftlicher Metaphorik und der Roman „Die Wahrverwandtschaften“*. In: Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft 25. (1981), S. 291.
 - 18) 1816年11月 7 日付ツェルター宛書簡の中でゲーテは、「私はリンネから、植物学だけでなく無限に多くを学んだ」と述べながら、「故人の中で私にリンネほど大きな影響を与えた人物は、シェイクスピアとスピノザを除いて知らない」と言っている (WA IV27, 219)。
 - 19) 「山脈」Gebirge は鉱山用語で、山岳の形と関わりなく、露出している全ての岩石 (Gestein) を意味する。
 - 20) 当時、地球の生成と形成をめぐる岩石水成論 (Neptunismus) と岩石火成論 (Vulkanismus) が学界を二分していた。A・G・ヴェルナーを創始者とする水成論が、結晶作用による岩石の大多数が原大海 (Urmeer) の水からの沈殿物であると見なし、そこには玄武岩も含まれていたのだが、それに対して火成論では、玄武岩が火山に由来しており、太古にはすでに火山が存在していたと主張する。1780 年頃は火山が原岩石の上にあったと考えていたゲーテは、イタリア旅行以後ヴェ

ルナーの水成論を信奉するようになったが、最終的にはアレクサンダー・フォン・フンボルト(1769-1859)の影響で火成論にも惹かれていたようである。この論争については『ファウスト第二部』第二幕「古典的ヴァルプルギスの夜」における水成論者タレスと火成論者アナクサゴラスの議論、ないし第四幕「高山」におけるメフィストフェレスの言葉にもその背景を看取することができる。なお、『注釈』にはこの鉱物学に関する記述は全くない。それはもしかすると晩年のゲーテにも確たることが言えなかったからかもしれない。

- 21) イタリアでゲーテの観察眼が拓かれたのは、ドイツでは「慣れ親しんだ植物」に接しても「観照しながらも考えない」(MA15, 69) 状態だったからだと言う。
- 22) 1786年9月27日パドーヴァにおける記述。
- 23) 例えば、後年のゲーテの主張である『頭蓋が六つの椎骨から成ること』にも、「原型」と「メタモルフォーゼ」の思想はうかがえる。先に引用した同書の冒頭文にゲーテは以下のように続けている。「人間にも間骨を認知することがとても重要であったのは、同時に骨学的原型の首尾一貫性があらゆる形態を徹して認められるからである。椎骨からなる頭蓋の構造も同じで、ひとたび認められると、重要な結果をもたらした。というのも、原型のなお明確に形成された個々のものの全ての同一性がこれによって同時に保障されたからである。ここには二つの要点が含まれている。有機的な自然を考察する際には全てが、それら二つの要点を理解して適用することに左右されるのである」(LA9, 357)。ここで「二つの要点」と呼ばれているのが、「原型」と「メタモルフォーゼ」の思想にほかならない。植物に関してゲーテが、葉という同一器官を原型とみなし、それが姿を変えながら全体を生成する様子に「メタモルフォーゼ」を見出したように、動物の骨においても彼は、椎骨を「原型」と見なし、それが変形した六つの骨から頭蓋が生成されるというメタモルフォーゼの考えを展開したのである。また、鉱物に関しても彼は、「花崗岩」を「原岩石」と見なし、それが変容するという思想を展開している。
- 24) 以下、引用原文は1790年の初出版『植物の変態を説明する試み』からではなく、『形態学』誌に採録された『植物のメタモルフォーゼ』から採っている。両者の違いは基本的に挿入された挿絵の有無である。本論がゲーテの自然科学著作の典拠としているレオポルディーナ版『ゲーテ全集』においても、後者にまとめられて掲載されている。本論では以後、『植物変態論』と略記する。
- 25) ゲーテが晩年に至るまで、「闇の一部」としての「根」をいかに捉えたのかについては、浅井英樹「まなざしのメタモルフォーゼ——ゲーテの植物形態学と文学における「根」の位置」(『モルフォロギア』第32号、2010年、60-74頁)を参照。
- 26) 遺稿『植物学の方法のための試み。企画の整理』の中でゲーテは、「なぜ根の杯は下方へ、葉の杯〔子葉〕は上方へ展開するのかという問いに私たちは、ここで両者の内に明確にされている一般的自然二元論(Naturdualism)に従ってそれらが互いに対置されていると答えよう」(LA10, 133)と言う。

- 27) なおゲーテ自然学の主著『色彩論』と『ファウスト』の関連については以下の拙論を参照。拙論「『献辞』における「曇ったまなざし」——『色彩論』から見た『ファウスト』における「曇り」の構造原理の一考察——」（『九州ドイツ文学』第21号、2007年、1-35頁）、拙論「Die Erlösungsstruktur in Goethes Faust – dargestellt mit Hilfe des Begriffs „das Trübe“ aus der Farbenlehre.」（『ゲーテ年鑑』第50巻記念号、2008年、173-188頁）、拙論「ゲーテ『ファウスト』における「最高の美」——『色彩論』が照らし出す「曇り」としてのヘレナ——」（『九州ドイツ文学』第24号、2010年、19-52頁）参照。
- 28) 初出は『ドイツのメルクア』誌1789年2月分冊。
- 29) そのような「あべこべな世界の叙述形式」を『ファウスト』の叙述形式に見出す試みについては別稿で論じた。拙論「ゲーテの『ファウスト』における「道化的なもの」——道化が道化でなくなるとき——」（『西日本ドイツ文学』第20号、2008年、41-57頁）、拙論「「無意味」の意味——ゲーテ『ファウスト』「魔女の厨」における「魔女の九九」の叙述形式——」（『ドイツ文学』第142号、2010年、133-148頁）参照。
- 30) ミハイル・バフチンは『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』（川端香男里約、せりか書房、1973年、220頁）の中でゲーテの『ローマの謝肉祭』を取り上げ、ゲーテの叙述におけるカーニヴァルの「両面価値的統合」を問題の核心に挙げておきながらも、「カーニバルの意味が、個人的な生と死の問題に局限されて」おり、「主要な集团的・歴史的要素が問題として提起されていない」ことを批判している。しかし、ゲーテの「死して成れ！」（MA11.1.2, 21）という思想は、個人的な生死の問題に局限されない。彼は、カーニヴァルにおける「生」の「全体」をも捉えようとしていたからである。
- 31) ローマの謝肉祭は、フランス革命軍進駐によって取り止められて以来、現在も開催されることがない。それ故ゲーテの体験記は、彼の後に続く旅行者に向けて描かれた案内書の側面を持つにもかかわらず、長年続いたこの祭を報告する最後の叙述となってしまった。（Vgl. MA3.2, 549）

Von *Aus meinem Leben Zweiter Abteilung* zum Zweiten Römischen Aufenthalt

—Versuche der Beschreibung des Unbeschreibbaren in Goethes *Italienischer Reise*—

Tomohisa HIRAMATSU

Für „eine wahre Wiedergeburt“ (MA15, 174) reiste Goethe (1749-1832) 1786 nach Italien, wo er innerhalb von etwa zwei Jahren die Vision der „Urpflanzen“ hatte und er „einen zweiten Geburtstag“ als Künstler bzw. als Dichter erlebte. Darüber schreibt er in der *Italienischen Reise* (1829), die *Aus meinem Leben Zweiter Abteilung* (1816-17) und den *Zweiten Römischen Aufenthalt* (1829) enthält. Aber es ist merkwürdig, dass beide Bücher erst ein viertel Jahrhundert nach seinem Erlebnis in Italien publiziert wurden und es scheint, als ob sie getrennt wären: Während das erste als *Zweite Abteilung Erster und Zweiter Teil von Dichtung und Wahrheit* angelegt ist, wurde das zweite noch später publiziert und dazu mit einem völlig anderen Titel. Das weist auf zwei getrennt voneinander zu sehende Entwicklungen in Goethes Denken hin; zunächst – gewissermaßen „im besten Mannesalter“ – verbindet er in Italien die Dichtung mit seinen Naturforschungen, in späteren Jahren beschreibt der alte Goethe sein eigentlich italienisches Erlebnis. Aus einer größeren zeitlichen Distanz sollte er später seinen Werdegang überblicken und selber den Unterschied zwischen dem ersten und dem zweiten Aufenthalt in Rom reflektieren. Aber warum sollte der *Zweite Römische Aufenthalt* so viel später als die ersten beiden Bände publiziert werden?

Zum 10. April 1829 überliefert Eckermann eine Äußerung von Goethe, wonach seine Briefe, die während des zweiten Aufenthalts in Rom entstanden, mit der *Italienischen Reise* nichts zu tun hätten, er habe aber darin „manche Äußerungen, die meinen damaligen *inneren* Zustand ausdrücken“ (MA19, 324) gefunden. Nun habe er „den Plan [gehabt], solche Stellen auszuziehen und einzeln über einander zu setzen, und sie so meiner Erzählung einzuschalten, auf welche dadurch eine Art von Ton und Stimmung übergehen wird“ (MA 19, 324f.). Goethe schreibt also, nach eigenem Bekunden, mit seinem autobiographischen Artikel zugleich eine „Erzählung“!

Die vorliegende Arbeit ist ein Versuch, zu erforschen, wie diese „Erzählung“ genau beschaffen ist und worin ihr „erzählerischer“ Charakter besteht. Der Zweck ist, den Kern seiner dichterischen Entwicklung in Italien darzustellen, und das Thema seiner „Erzählung“ klar zu machen. Dazu lohnt sich auch eine Betrachtung des *Römischen Carnevals* (1789), weil das Buch zweimal fast ohne Veränderungen publiziert wird; zunächst 1789 sofort nach seiner Rückkehr nach Weimar und eben 1829 am Ende des *Zweiten Römischen Aufenthalts*.

Am Anfang des *Römischen Carnevals* führt der Erzähler aus: „Indem wir eine Beschreibung des römischen Carnevals unternehmen, müssen wir den Einwurf befürchten: daß eine solche Feierlichkeit eigentlich nicht beschrieben werden könne“ (MA3.2, 218/ MA15,572), denn „eine so

große lebendige Masse sinnlicher Gegenstände sollte sich unmittelbar vor dem Auge bewegen, und von einem jeden nach seiner Art angeschaut und gefaßt werden,“ (MA3.2, 218/ MA15,572) – und weil „das römische Carneval einem fremden Zuschauer, der es zum erstenmal sieht und nur sehen will und kann, weder einen ganzen, noch einen erfreulichen Eindruck gebe, weder das Auge sonderlich ergötze, noch das Gemüt befriedige“ (MA3.2, 218/ MA15, 572). In der Tat konnte auch Goethe den Carneval zunächst nicht „verstehen“, so dass er sich auch nicht abgehalten fühlte, bald darauf nach Süden abzureisen. Die Beschreibung seines ersten Karnevalserlebnisses bildet den Trennpunkt zwischen dem ersten und zweiten Teil der *Italienischen Reise*. Deswegen bedeutet der *römische Carneval* – ein Text, den Goethe nach dem zweiten Italienerlebnis schrieb – eben einen Refocus, d.h. den Versuch, das Unbeschreibbare zu beschreiben. Dazu wird das Gleiche danach im *Zweiten Römischen Aufenthalt* auch das Hauptthema des ganzen Buches und gewissermaßen auch des Lebens des alten Dichters selbst. Darin besteht nämlich der „Beschreibungsversuch des Unbeschreibbaren“. Darüber hinaus soll untersucht werden, was das Unbeschreibbare für ihn war, und wie er es dann doch „beschrieb“.

Im ersten Kapitel dieser Arbeit wird der Prozess seines beschreibenden Blicks zur *Einfachen Nachahmung der Natur, Manier, Stil* (1789) betrachtet. Goethe glaubte, ihn unterwegs auf der Reise nach Süden gefunden zu haben und schreibt am 17. Mai 1787 an Herder: „*Sie* [die Griechen wie Homer] stellten die Existenz dar, *wir* [die Neueren wie Goethe] gewöhnlich den Effekt; *Sie* schilderten das Fürchterliche, *wir* schildern fürchterlich; *Sie* das Angenehme, *wir* angenehm, u.s.w.“ (MA15, 393). Der Verzweifelte habe deswegen begonnen, die Natur in Gemälden anzusehen und wiederzufinden und zu lesen (Vgl. MA15, 427), so dass die Kunst für Goethe „wie eine zweite Natur“ (MA15, 464) wird. Dafür spielt seine Naturforschung eine große Rolle.

Im zweiten Kapitel wird der Entwicklungsprozess seiner Naturlehre betrachtet; von Naturphilosophie, Mineralogie, Anatomie, Biologie bis zur Morphologie und Farbenlehre. Goethe glaubt an die Konsistenz der Natur, so dass er in seiner Naturforschung nicht nur Zwischenknochen des Menschen entdeckt, sondern auch den Begriff der „Urpflanzen“ entwirft, deren Gedanke als „Urtyp“ sich zur Idee der „Metamorphose“ entwickelt. Mit anderen Worten kann man sagen, dass der Gedanke des Urtyps sich auf das „Was“ in der Naturschilderung bezieht, während die Beschreibung der Metamorphose das „Wie“ thematisiert; worauf der Umstand schließen lässt, dass Goethe in seiner Eigenschaft als Naturliebhaber das Wort „Urpflanzen“ niemals in seiner *Metamorphose der Pflanzen* (1790) benutzte. Dieser Begriffsverzicht illustriert die „trübe Beschreibungsart“. Man unternimmt eigentlich umsonst, „das Wesen eines Dinges“ (z. B. das Licht oder die Finsternis) auszudrücken und deshalb wünscht man durch eine vollständige Geschichte von deren „Wirkungen“ im sogenannten „Trüben“ (das nach Goethe zwischen Licht und Finsternis existieren soll,) höchstens das Wesen jenes Dinges zu umfassen, so dass ein Bild einem entgegentreten wird (Vgl. LA4, 3).

Im dritten Kapitel wird erläutert, dass Goethe eben diese „trübe Beschreibungsart“ auf den

römischen Carneval angewendet hat. Dies führt er selbst in *Schicksal der Handschrift* aus; drei Aufsätzen, die ebenfalls 1789 entstehen, so dass der *römische Carneval* mutmaßlich viel mit den anderen zwei Arbeiten zu tun haben sollte. Auch befasst sich Goethe in *Das römische Carneval* ausdrücklich mit einem von ihm so genannten ergänzenden „dritten“ zu den beiden Hauptthemen der anderen Schriften: „Wie aus dem Zusammentreffen von Notwendigkeit und Willkür, von Antrieb und Wollen, von Bewegung und Widerstand ein drittes hervorgeht, was weder Kunst noch Natur, sondern beides zugleich ist, notwendig und zufällig, absichtlich und blind“ (LA9, 62). Goethe, der Teilnehmer am Karneval, trägt auch „eine Maske“ als „der Fremde“ (MA3.2, 229), damit er die Wahrheit des Ereignisses aus einer kritischen Distanz erfassen kann, und er bedenkt „die wundersame Komplikation der menschlichen Natur, in welcher sich die stärksten Gegensätze vereinigen, Materielles und Geistiges, Gewöhnliches und Unmögliches, Widerwärtiges und Entzückendes, Beschränktes und Grenzenloses...“ (MA15, 558). Sein Beschreibungsversuch des Unbeschreibbaren sowohl im *römischen Carneval* als auch im *Zweiten Römischer Aufenthalt* besteht darin, „den natürlichen Zustand mit dem unnatürlichsten in unmittelbare Berührung, ja zur Vereinigung“ zu bringen (MA15, 558). Er versucht, „das Leben im Ganzen“ (MA3.2, 250/ MA15, 607) bzw. das Ganze im Leben zu begreifen und seine „Erzählung“ mithilfe der „trüben Beschreibungsart“ zu verfassen.